

期待と不安の年明け

今年はどうな年になるだろう。一家は昨年とは様変わりした1年のスタートを切った。

会津若松で迎えた正月はどんより曇っていて、いつも自宅近くの海で望んだ初日の出は見られなかった。

幸さんは、東京電力からの賠償をめぐ

り、六つの家族と共同して書類をそろえ、弁護士とやりとりする毎日。「東電関係者が多い町民の中で重い雰囲気はあるけど、納得できないことには声を上げたい」

沙也加さんは、2月に控えた受験まで1カ月を切った。「なんか私、勉強しなくなっちゃった」とマイペースにつぶやく姿は親をハラハラさせるが、長い避難生活で得たたくましさもうかがわせる。

「窮屈な寮生活から抜け出せる」。帰省

原発1キロからの避難
いつの日か

—29—

を終え、東京での大学生生活に戻った梨奈さんは、アパートを借りて一人暮らしを始めた。「バイトも見つけようかな」。家財を積んだ車で200*以上の道のりを送ってあげた光一さんにとってはいつまでもかわい

い長女だが、本格的な自立も近い。飼いだのタローも足を滑らすほど、雪の絶えない冬の会津。いわき市の仮設住宅に引っ越す3月がくれば、少し慣れたこの土地ともお別れだ。「また中身の濃い1年に

なりそう」。門松もしめ縄も見かけない仮設住宅の中で、幸さんは期待とも不安ともつかない思いを口にした。

痛くはなわ。さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生生活。